

〔課題演習抄録〕

社会的自立を促す生活単元学習における教材開発の研究

井 手 口 桃 佳

Momoka IDEGUCHI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：特別支援学校，社会的自立，生活単元学習，教材

1 研究の目的

文部科学省(2007)は，特別支援教育について，自立や社会参加に向け，教育的ニーズを把握し，その持てる力を高めたり，生活や学習上の困難を改善又は克服したりするため，指導・支援を行うものとしている。実際に特別支援学校では，児童生徒の社会的自立を目指した学習が，至る所に組み込まれている。特にその特徴の見られるのが各教科等を合わせた指導である。

そこで，社会的自立を促すための指導・支援にあたり各教科等を合わせた指導の1つである生活単元学習に焦点を当てた。青木(2014)は，生活単元学習について「その活動や学習の目的に主眼を置き，児童生徒の生活に根付いた体験を通して学ぶことを目指したものである」と述べている。

そのため，本研究では，子どもの社会的自立を目指し，生活上の目標や課題に沿う疑似体験や視覚教材等の開発を行い，活動的な実践授業を通してその有効性を検証することを目的とする。

2 研究の計画

生活科における目標や内容の中から，特に児童の生活上の目標や課題であるものとして，横断歩道の渡り方と洗濯物の畳み方を取り上げ，実践授業を行った。授業を撮影した映像やボイスレコーダーから，作成し使用した教材が児童の学習にどのような効果をもたらしたのかを分析・考察する。

3 研究の内容

(1) 先行研究

教材の中でも視覚的に印象を与えて支援を行う

視覚教材に関して，政倉ら(2008)は，重要な情報を伝える方法として視覚の手がかり(cue)の提示を挙げている。情報量の多い写真の中から，全体の情報を減らすことなく，枠で囲んだり，情報を変化させたりすることにより，重要な情報を強調することができると述べている。

(2) 児童実態

本時での対象児童は福岡県立特別支援学校の知的障害学級6年生の6名である。

	日常生活の実態
A児	<ul style="list-style-type: none"> ・言語指示を理解することができる。 ・周囲に気を配ることができる。 ・自己判断することが難しい。 ・自信をもって行動を選択することが難しい。
B児	<ul style="list-style-type: none"> ・言語指示を理解することができる。 ・集中すると進んで課題に取り組むことができる。 ・自分に自信がなく教師の顔色を窺うことがある。 ・周囲の友だちの真似をしてしまうことがある。
C児	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な言語指示を理解することができる。 ・言葉かけから活動に取り組むことができる。 ・文字やマークに興味がある。 ・両手を使つての作業や細かい作業が難しい。
D児	<ul style="list-style-type: none"> ・言語指示を理解することができる。 ・状況に応じた判断をすることができる。 ・落ち着いて行動することが難しいことがある。
E児	<ul style="list-style-type: none"> ・身辺自立は難しい。 ・教師と一緒に活動に取り組むことができる。 ・友達の様子をよく見て，指差しをしたり拍手をしたりすることができる。
F児	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な言語指示を理解することができる。 ・言葉かけから活動に取り組むことができる。 ・細かい作業が難しい。 ・動きがゆっくりで，停止してしまうことがある。

(3) 実践授業

①実践授業Ⅰ

実施日	平成30年7月5日(木)
单元名	信号を見て，横断歩道を正しく渡ろう
ねらい	歩行者用信号機を見て，横断歩道を正しく渡ることができる。

作成した教材は，a.紙芝居，b.約束カード，c.歩行者用信号機，d.横断歩道，の4つである。

成果（○）と課題（●）は以下の通りである。
○児童に成長が見られた。難しい児童に関しては、歩行者用信号機や横断歩道に目を向け、外の世界に興味をもつきっかけになったと考える。

●活動内容が多く、実際の生活の場面で使わないものが含まれていた。児童の生活に寄り添った内容や教材ではなかった。

②実践授業Ⅱ

前期の実践授業の課題から、後期においては、より児童の生活に寄り添った授業内容や教材を作成し、社会的自立のきっかけになることを目指し、以下の授業を考案した。

実施日	平成 30 年 12 月 6 日（木）12 日（水）
単元名	洗濯物をきれいに畳めるようになろう
ねらい	洗濯物を畳むことができる。

本時においては、3つの視点から授業を行った。
1 つ目は知識・技能として、洗濯物を畳むことができるようになること、2 つ目は思考・判断・表現として、なぜ畳まないといけないのかわかること、3 つ目は学びに向かう力・人間性として、畳もうとする意識や学び合うことができることである。



図1 視覚教材

導入においては、a の紙芝居を使用した。洗濯物を畳まなければならない理由と畳むときの約束について触れた。特に知識・技能や思考・判断・表現の面での効果を期待し、作成した。作成する際に視覚的手がかり（cue）を使用し、×や○のカードなどを紙芝居に貼り付け、特に意識してほしい点や探しにくい点を強調した。実際に児童の反応では、×カードに触れてみたり、前かがみになって紙芝居を覗き込んだりする様子が見られた。

展開においては、b の約束カードと c の手順表を使用した。b については、紙芝居の中に出てきたものと同じものを使用した。約束の数は3つとし、児童 6 名の実態から設定した。「①目で見よう」では、よそ見をしてしまい止まってしまう児童が4名、「②両手を使おう」では、両手を使う作業が苦手な児童が2～3名いたことから考えた。

「③しゅっしゅっしゅっ」においては、洗濯物を畳む際にしなければならず、どの児童にもできるであろうものとした。c においては、A・B・D・F 児を洋服を畳むグループ、C・E 児をタオルを畳むグループとし、それぞれ手順表を配布した。洋服の

手順表には青い星（右手）と黄色い星（左手）、緑の矢印（折る方向）をつけ、実際に教師が実演して見せた。タオルの手順表には、文章もマークも付けず、写真のみとした。タオルを畳む児童2名に関しては、教師の声かけなどによる指導のもと、写真の形になるように畳もうとする意識が見られた。また、洋服を畳む児童4名に関しては、手順表と洋服を見比べながら畳んでいく様子が見られた。その中でも、A 児と D 児に関しては、お互いに「ここしわが付いてるよ」といった声かけや手順表を見やすいように持ってあげたりする様子があった。

4 成果と課題

教材	成果（○）と課題（●）
a. 紙芝居	●畳まなければならない理由を答えることは難しかった。（思考・判断・表現） ●授業後、洋服を畳んでいない児童が見受けられた。（思考・判断・表現）
b. 約束カード	○洗濯物を畳もうとする意識が全児童から見られた。（知識・技能）（学びに向かう力・人間性）
c. 手順表	○洗濯物と見比べながら畳むことができていた。（知識・技能） ○友達の活動の様子を手順表と照らし合わせながら、教え合いをしたり、良さを伝えたりする様子が見られた。（学びに向かう力・人間性）

これらのことから、畳まなければならない理由や授業後の児童の意識に関して、課題があることが分かった。そのため、cue を活用する際に、児童により注目してほしい部分や印象に残してほしい部分に、多く取り入れる必要があった。それにより、授業後の児童の意識にもつながるのではないかと考える。また、実物を教材として提示することで、今後の意識につながるような印象を与えられたのではないかと考える。

今後は、cue のより有効な活用方法や授業後の意識づけのための教材について検討したいと思う。

主な引用・参考文献

- 青木猛正 2014 特別支援学校におけるキャリア教育のあり方 立教大学教職課程教職研究, 24, 1-10
毛塚滋 2018 特別支援学校の授業に役立つ自作創作教材・教具
<http://www.asahi-net.or.jp/~ue6s-kzk/>
政倉裕子・永井聖剛・熊田孝恒 2008 視覚の手がかりの印象と注意を誘導する効果との関係 日本感性工学会研究論文集, 517-523
文部科学省 2007 特別支援教育の推進について（通知） 第125号